第11回 文芸思潮 エッセイ賞 最優秀賞

Essay

時空を超えて

岡野真弓

一九九八年、私はローマで国際性を体験するための研修に参加していた。アジア、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカから数十名集まっており、自己紹介が順番に義務づけられていた。

日本の地理、人口、産業などを話した後、働いていた病院の紹介をした。創立が昭和六年と古いためか、親子代々に渡る近隣の患者さんが多い。流暢からほど遠い英語のためか会場は静かだった。しかし、

「患者さんは『この病院で死にたい』と言って来られます」

と誇らしく言った途端、大爆笑が起こった。私は、最後の時を安心して過ごせる、という彼らの信頼をありがたく思っていた。しかし他国からの参加者にとって、病院とは病気を治す所以外ではありえなかったのだ。「死ぬ病院」とは「病人を治せず、死なせてしまう病院」と理解されたことに気が付いた私は心底、くやしかった。しかしうまく説明することが出来ず、黙してしまった。

それから十年後、海外での医療援助から戻って、二〇〇八年から同じ病院に勤めるようになった。最近も「ここで最後を迎えさせてください」と言って訪ねて来る方に出会う。

『医師の仕事が病気を治すことだと考えるなら必ず敗北する』と医学生のころある教授に言われた。その時にはその真意がわからず、不安と困惑を感じた。敗北する？　それなら連日のハードな勉学と実習は何のためなのだろう、と

小さな憤りさえ感じた。

確かに彼が言ったことは正しかった。人は皆死ぬからである。医師となってからお見送りした方は百人を超えるだろう。では私の歴史は敗北の連続か、といえば、年を追うごとにそうではないとわかってきた。

この人は助からないのだろうと思った時、医療者は言わば伴走者となる。負け戦とわかってもその場から逃げずに、逝こうとしている人の近くに居続ける。

私が看取るのは病院での死に限っているが、それでも病気の多彩さに加えて、さまざまな社会的状況で亡くなる人がいる。老衰とも言える慢性の心不全や繰り返す肺炎の方、がんのターミナル（終末期）の方もおられる。そして見送る側にもいろいろある。

「おかあさん。ありがとう」「おばあちゃん！」と耳元で叫ぶ家族に囲まれて最後を迎える人が多いが、親族知人もなく亡くなられる方も結構いらっしゃる。これも都心の病院ゆえかもしれない。

身寄りがない場合は医療ソーシャルワーカーを通して、連絡の途絶えた親族がいないか、探してもらうことになる。離婚した妻がいるらしい、とか数十年会っていない子供がいるらしい、とわかってくる。しかしその家族が会いに来ないことも往々にしてある。

数年前になるだろうか。アパートの一室で動けなくなっていたのを発見されたのは、やせ細った七十代の男性、癌の末期だった。

母親は小さい彼を連れて再婚したそうだ。多くは語らなかったが、中学卒業後、家を出てしまい、実母とも疎遠になった。体が動くうちは働けた。

「あのまま家で死んでもよかった」

自分が治らない病気であるとはわかっていた。もうこれで終わりにしようと思ったのだろうか。彼はそれから一か月、病院で過ごした。実母はとうに亡くなっており、血のつながらない兄たちには、

「迷惑をかけたくない。連絡しないで下さい」と言った。

痛みの訴えもあまりなかったが、

「以前の病院ではチューブを入れられ、苦しかった。もうしないでくれ」

ただ穏やかに過ごすことだけを望んでいた。看護師が薬の乗ったカートを押して部屋に行く。痛みや食事の様子をたずね、清拭を手伝う。痩せた体は清潔なシーツに横たわり、ベランダからは朝日が差し込む。それが最後の日々だった。

死ぬのは一回きりの体験だ。その瞬間に何が起こっているのか、どんな気持ちなのか、わからない。正直、私は死がおそろしい。

「死ぬことはこわくありません」と患者さんに言われたことが何度かある。でも私は自分が今あるようには存在しなくなると想像するだけで、足元の地面が崩落するかのような恐怖を感じる。

百人以上の人を見送ってきた経験を思い起こすと、最後まで意識がはっきりしている人はまれである。もとの病気のために少し前から意識レベルが下がる人もいれば、これはかなり高齢の方々だが、食事をほとんど取らなくなる人もいる。いくら勧めても食事をしようという気持ちがなくなるようである。そのようにしてほとんどの人が大なり小なりぼんやりとしていく。天の配剤なのか、麻酔がかかったかのような状態で最後を迎える。

耳は最後まで聞こえると言われている。もう一週間もわずかの水分ぐらいしか取らないで、昼夜ずっと寝ているかのように見えた人が、家族が来ると目を開けてうなずく。孫を見て笑顔を見せ、いたわる言葉を発することもある。家族の力は偉大である。

さてこのように徐々に朦朧とした世界に沈んでいく人は夢うつつの中でなつかしい人の面影を見、会話しているのかもしれない。九十代の女性は、見舞いに来た家族の後ろに男の人が見える、と言ったという。誰が見えたのだろう。それはずっと前に死別した夫だったかもしれない、と考えてみるのはロマンチックすぎるだろうか。そうしてみると、家族に見守られずに旅立つ人のそばにも懐かしく、愛おしい人が迎えに来ているのかもしれない。

医療者はこの舞台では隅のほうに立つ黒子である。大切なことは、そこで何が起こっても舞台から退いてはならないということである。主役を中心とする出演者たちの顔を見守り、必要とされる手を差し伸べながらそこに居続けるのである。

さて、亡くなると不思議なほどに、清らかに輝くような顔になる。それまで自信がなさそうにうつむいていた人も、不安を顔に張り付かせていた人も、すっと顔を天に向けて、迷うことなく旅立つ姿になるのである。「ああ、この人はこんなに美しいひとだったのか」と思うことがよくある。そして目の前からはいなくなってしまうのだが、そこから不思議なことが起こることがある。ふとその人の存在をすぐそばに感じるのである。私には霊感はなく、声が聞こえ、何かが見えたことは一度もない。しかし何のきっかけもなく、その人のことを思い出すのである。この現象は、元気になって退院した患者さんには起こらない。

亡くなってすぐ、その人をすぐそばに感じた時には、亡くなるまでの過程で起きたこと、治療の是非を尋ねる。「あの治療でよかったでしょうか」と今は見えない存在に問いかける。AではなくBの治療を選べばよかった、と思

うこともあるからだ。

まだ医者になって間もないころ、二十数年前だが、今のように緩和医療が十分に浸透しておらず、私は経験の浅い研修医だった。その日は休日だったが病院から呼ばれた。末期癌の人が痛み、苦しみ始めた、と言うのだ。

駆けつけると、家族に「あんな苦しみがあるなんて……」と泣かれた。

もっと早くに痛み止めを始めていれば体験させなくてよかった苦しみをその人と家族に負わせてしまったことを私は長い間、気に病んでいた。

しばらくたったころだった。夏休みだったろうか。数日間、勤務から離れることが出来た時、想像の中で彼に話しかけ、痛い思いをさせてしまったことを再度、謝った。

これから先の話をずいぶんと自分に都合の良い妄想と思われるかもしれない。しかしその想像の会話に現れた彼は、意外なことに笑顔だったのである。そして「よくやってくれたよ」という言葉は私のこころに浸み込み、後悔という私の痛みを癒してくれたのである。

エリザベス・キューブラー＝ロスは『死ぬ瞬間』の著者として、ターミナルケアのパイオニアとして世界中にその名を知られた精神科医だ。その彼女が後年、死後の世界についての著作をあらわすと当時の識者、学者たちは科学的ではないといって批判した。

どうしてそれまでの自らの業績を貶めるようなことをするのだ、と書かれたものを読んだこともあり、当時、私も同意見だった。しかしこうして臨床の場で多くの人を見送ってくると、先に旅立った彼らとの交流があるとしか思えないことがある。

亡くなられてすぐのころは特に、その人の気配をすぐそばに感じることがあるし、しばらくたったころにでも、ふと思い出すことがある。そういう時には、「ああ、私を訪れてくれているのだ」と懐かしく思う。

その時の彼らからは、まだこの時空に留まる私たちへの思いやりさえ感じる。私たちのありようから超越したところに存在するからだろう。

岡野真弓

おかの　まゆみ
1956　東京生まれ
92　聖マリアンナ医科大学卒
現在　都内の病院にて内科医として勤務している
マリアの宣教者フランシスコ修道会
会員

受賞の言葉

岡野真弓

このたびは最優秀賞をいただき本当にありがとうございました。四月中ごろ、作品に登場する九十代の患者さんをお見送りしました。何年か外来でお付き合いした方でした。亡くなられたお顔がまるで輝くようだったこと、そしてふとした瞬間に笑顔が思い出され、突き動かされるように書き始めました。しめきりまで時間がありませんでしたが、仕上げることが出来たのは、登場するたくさんの方々から力を注がれていたからに違いありません。

悩み戸惑いながらの二十余年の臨床体験そのものが、其中にはぐくまれた真珠のごとき宝であったことを、自らの作品を読み直した時に深く感じました。

身に余る大きな評価を与えてくださった選考委員の皆様に深くお礼申し上げます。

銀華文学賞奨励賞受賞

人は法の裁きによって冷厳にのみ処理されるものなのか。法廷の場で裁断される人間が、苦悶し、叫びをあげる。その生身の声がここにある。裁かれる人間——その姿に肉迫し、叫びと真の思いを描く法廷文学。法と人間の狭間を鋭く突く新鋭小説集

1600円（税込／送料共）

バブルの開発ラッシュは人を狂わせる……

土地には地霊が棲み、代々の人間が心血を注いで守り育てて来た土地を、いたずらにいじりまわし、狂暴に利用しようとすれば、必ず災厄が降りかかり、その人間を危機に陥れる——土地の開発では人が死ぬ……

1700円（税込／送料共）

御注文はアジア文化社まで